

宗教史学者が
世界六大宗教から選ぶ

「信仰のことば」

菊地章太

信じていないからこそ、
語れることがある。

キリスト教、ユダヤ教、イスラーム、仏教、儒教、道教。
宗教史学者が、研究者人生で出会った心に響くことばを厳選！

宗教史学者が世界六大宗教から選ぶ「信仰のことば」

菊地章太

星海社

314



はじめに

ここに集めた信仰のことばの数々は、自身が勇気づけられたものであるよりは、世の中をあきらめることができたものの方がよほど多い。それにはもちろん理由がある。

占いが約束したはずの幸せにすがりつけなくなったとき、夢に描いた日々を思い出すことさえ疎ましくなったとき、世間から相手にされない自分にあいそが尽きたとき……、この世ならざるものに思いをひそめる。信仰に向かって心が動くのは、おそらくそこから先のことであろう。

聖書や仏典に書いてあることをそのまま信じるのは、今の時代には（少なくとも自分には）もはやできない。それでも、信仰に生きた人々が作りあげたものの大きさは、宗教を頼みにしていない身にも感じることはできる。その圧倒的な迫力、その恐ろしさ、あるいは、優しさ、悲しさ、そして美しさに囚とらわれてしまったとき、ちっばけな自分などもうどうでもよくなる。私たちは特定の宗教を信じることはなくても、信仰によって作られたもの、書

かれたもの、なされたことを通じて、宗教の力を実感できるのではないか。その偉大さを信じることもできるのではないか。そのために、ものそのものに、あるいはことに、じかに向きあえる場に自分を置こうと努めてきた。とはいえそれを実現させていくのは並大抵ではなく、半生をかけてもかなわぬことばかりである。

生まれ育った土地では教会が身近にあり、求めるところがあつた。大学へ進める境遇ではなかつたが、もしもかなうなら、キリスト教の信仰や芸術について学びたいと願つた。大学を出てから、その根底にある神学への思いやみがたく、給費留学生試験を受けて、フランスの神学大学で学んだ。帰国して小さな女子大学に就職し、そこでいろいろな授業を次から次へと受け持つことになった。追われ続けて、ずっと抱いてきた夢も消えてしまった。そうして専門とするものもいままに歩いてきたのである。

信仰を抱くことはいつになつた。それでも信仰の世界にあこがれ、思いめぐらすことに自分をつないできた。いくつものあきらめから立ちあがろうとしてきた。本書を手にとつてくださる方々に、たとえわずかなりとも心に響くところがあつたなら、このうえなくありがたいことだと思う。

付記

本文中に参照した原典を示した。多くの注釈書に助けられて読み解いたものばかりだが、それは注記していない。とりわけイスラームに関する記述は、邦文や欧文の訳書に頼った。文献を引用する場合、本文に応じて文字や表記を改めてある。そのこともここにまとめて記しておきたい。宗教文献に登場する人々の呼称には、現在は差別語とされるものが少なくない。もとより差別の意図はなく、ここではそのまま用いた。

目次

はじめに 3

一 儒教のことば

15

今の自分は東へ西へ、南へ北へと行ったり来たりする身である。 16

世に用いられなかった。だからなんでもできるのだ。 20

なんとも香り高く端正ではないか。その周に私は従おう。 25

神靈は人から遠く隔たったところにおられるのでしょうか。 29

魂には行けぬところなどない。行けぬところなど……。 34

二 道教のことば 41

世の中の役に立たない者になることをずっと願ってきた。 42

人々はおのずから裸の心でいられる。 49

「道」には永遠に名がない。 56

よごれたままでよかつたなら、そこは世の中の谷となるだろう。 61

それは淵のごとくあらゆるものの根源を思わせる。 65

根源に帰る。それが「道」の働きである。 70

三 仏教のことば 77

世のすみうきはいとふたよりなり。 78

わが往生すなはち仏の正覚なりと心得べし。 84

みな、いしかわらつぶてのごとくなるわれらなり。 90

明日、佐渡の国へまかるなり。 96

我もしらず人もわきまへがたきか。 102

なみだ二のそでをしぼるといへども、心は九品の土にまうづるがごとし。 107

業にひかるゝ魂魄を 導きたまへ地藏尊 114

西の河原の物がたり 聞くにつけても哀れなり 120

五條の橋の下むせび はては涙の流れ灌頂 126

四 ユダヤ教のことば

131

私の先祖はさまようアラム人でした。

132

恐れるな。あなたたちの神、主ご自身が戦ってください。

138

刈り入れのあとで落ち穂を拾ってはならない。

144

ここに私があります。私をつかわしてください。

149

その打たれた傷によって私たちは癒やされた。

156

あなたの若い日にあなたの造り主を覚えよ。

163

おまえが正しいことをしているなら顔をあげたらよいではないか。

169

五 イスラームのことば

177

しかたない。この子のために神様がお恵みをくださるかもしれんぞ。

178

おまえたちはみなし子を大事にしてやらなかった。

184

道に迷っていたおまえを見つけて手を引いてくださったではないか。

188

神の道のためにおまえたちに敵対する者と戦え。

193

あなたにはあなたの宗教、私には私の宗教がある。

197

六 キリスト教のことば

205

信じます。信仰のない私を助けてください。

206

ガリラヤであなたたちはあの方に会えるだろう。

212

私は自分のしていることがわからない。

217

理解を超えているからこそ一途に信じることができ

221

この世のへたくそな芝居を見せられるのはどれほどつらいことか。

227

手がからっぼなのがうれしいんです。

233

もっとも小さな者のひとりにしたこと、それは私にしてくれたことなのだ。

236

おわりに

246

一 儒教のことば

今の自分は

東へ西へ、南へ北へと

行ったり来たりする身である。

その人は幼いころ父を亡くした。

それからは母とふたりきりで暮らした。やがて母も亡くなる。父の墓がどこにあるかわからない。いっしょに眠らせることができずにいた。

その人自身、中年を過ぎても居場所を見つけれない。住む家も定まらぬ身である。いつか人づてに聞いて、亡き父の墓が知れたので、母をかたわらに葬ることができた。ふた親の墓をようやく築くことができたのだ。

彼が立ち去ったあと、雨が降り続いた。いつしか大雨となった。聞けば、墓の土はくずれてしまったという。離れた場所にいる身では、どうすることもできない。だまって聞いているうちに、涙がぼたぼたとこぼれてきた。

その人の名は、孔子である。あの『論語』の孔子である。天は孔子にささやかな父母の墓を築くことさえ許さなかった。この哀話は儒教の聖典『礼記』らいぎ「檀弓上」だんぐうに出てくる。紀元前の前漢時代に成立した書物とされ、孔子の没後数百年を経て書かれた。やがて中国思想史に冠絶する孔子の名声は、このときすでに確立しつつあったとはいえ、こうした挿話もいくつか書きとめられている。

孔子は晩年なおも流浪の身であったという。みづから語る。

「今の自分は東へ西へ、南へ北へと行ったり来たりする身である。せめて父母の墓をそれとわかるようにしておきたかった」

最初の一文、もとの漢文を読みくだせば次のとおりである（原文は以下を参照。新釈漢文大系『礼記上』明治書院、一九七一年）。

「今、丘や、東西南北の人なり」

丘は孔子の名である。孔子の母は巫女とされる。底辺の身だった。孔子は庶子だともいう。教育と言えるほどのものは受けていない。長じて倉庫の番人となったのち、職を転々とした。ときは紀元前の春秋時代である。諸子百家が並び立った。かつて周王朝に栄えた礼の学問はすたれて久しい。正統な伝授が途絶えた礼学ゆえに、孔子はこれを身勝手に標榜して仕官に努めたが、いつも状況がわざわざいして長続きたためしがない。失意の連続だった。「東西南北の人なり」ということは、彼の境遇をたしかに伝えている。

孔子の没後数世紀を経て、その主張は儒学として堅牢堅固に整備され、東アジアの宗教思想の根幹となっていく。彼自身も聖人と崇められたが、それはずっとのちのことである。事実は失敗の人生であった。

東西南北の人。——決して他人事ではない。おのが居場所が見つからない。いずこの土

地の土と終わるか知れない。どれも身につまされることばかりだ。そんな身の上から語り出されたことばにこそ、おつにすました後世の聖人像からは想像もつかない、老残の人の真実がこもっているように思えてならない。

世に用いられなかった。

だからなんでもできるのだ。

あるとき太宰たさいが孔子の門人の子貢しこうに問うた。この話は『論語』「子罕しかん」に出てくる。太宰というのは大臣の官名である。呉ごの国の大臣だという。その人がこんなことを尋ねた。

「あの御方は本当に聖人なのかね。すいぶんいろいろとおできになるようだが」

世間では孔子を聖人とうわさしている。大臣はそれに疑問を抱いたのだろう。子貢は答えた。

「もちろんです。孔子様は天の許したもうた大聖ですから、本当にいろいろなことがおできになるのです」

のちに孔子はふたりの問答を伝え聞いて、こう語ったという。

「大臣殿は私の素性を見抜いたようだ。私は生まれついてからずっと下賤の身だった。だからつまらないことでも何でもこなしてきた。そもそも立派な君子はあれこれできるものではない。あれこれできるような男が君子であるわけがない」

原文の一節は次のように読みくさせる（原文は以下を参照。新釈漢文大系『論語』明治書院、一九七六年改訂版）。

「吾わ、少くして賤いやしかりし。故に鄙事ひじに多能なり」

鄙事ひじというのは卑いやしい仕事のことである。なんでもかんでもできるとしたら、それこそ

身分が低い証拠である。洋の東西を問わない。貴顕の人は指図するだけでよい。こまごました仕事は召使いや奴隷がする。そんなことに長けたやからが聖人のはずではないか。孔子はそれをわきまえていた。身に沁みて知っていた。

孔子の生い立ちについては不明な点があまりに多い。若いとき倉庫の番人をしていたという。これは司馬遷の『史記』に記されている。牛小屋の番人もしたという。家畜を上手に育てたとあるから、たしかに「鄙事に多能」であったのだろう。

『史記』の「孔子世家」は孔子の伝記としてもつとも古く、また詳細であるが、あまりあてにならないことは古くから言われてきた。ただ、卑賤の出であったことは間違いないさそうである。

先ほどの文章に続いて、門人の子張しちやうが聞いた孔子のことばを伝えている。

「自分は世に用いられなかった。だからなんでもできるのだ」

原文を読みくだせば次のとおり。

「吾、試もちられず、故に藝げいあり」

うしろだてのない人間の哀しさである。「藝あり」とは多能ということである。何でも器用にこなせたところで、そうやすやすと雇ってくれるところなどない。何もせずともよい

役がまわってくる、そんな結構な境遇とは縁がなかったのだから仕方ないではないか。

古い川柳がある。

「藝が身を助くるほどの不仕合ふしあわせ」

『牧野富太郎自叙伝』を読んでいたら、この句が引いてあった。

生家のたくわえを使いはたしたとき、大学の植物学教室に助手として採用されたという。のちにその抜群の業績が認められ理学博士の学位を授与されるが、もともと経歴が貧しく、もちろん後見もない。家族を養うにはまるで足りない給料だが、ともかくも職にありつくことができた。そのときこの句を思い返したそうだ。

句の作者は京都の俳人とされる。享和三年（一八〇三）の随筆集『東牖子とうゆうし』に言及があり、当時あまねく知られた高名の句だったという。辞書（たとえば『日本国語大辞典』）の説明では、道楽で習い覚えたことを、おちぶれてから稼業にすることの情けなさを吐露した作とされる。しかし牧野博士はそうした意味でこの句を引いてはいない。

博士の自伝は肝心のことは伏せておいて手柄話ばかりである。自伝とはそういうものだが、なにしろスケールが大きい。それでも、ときおり身を切るような思いが透けて見える。博士はあまたの植物図譜を文字で記述し、写生画を描き、印刷屋に師事してみずから石版

で印刷し続けた。たったひとりですれをこなしてきたのである。

何でもやる人を世間はほめそやし、そして軽んじる。何でもかんでもやって生きていくしかなかった。そのつらさは本人しか知りようがない。そんなとき思い出したい。みずからの道を見ずから切り開いていったこの人たちを。

なんとも香り高く端正ではないか。

その周に私は従おう。

昔はよかった。

老いの繰り言、私も日にいくたびか口にする。

今より昔がよいはずがない。今が不快でたまらないから、今の人が知らない昔を持ち出してきて称讃する。このあわれむべき老人性懣症かんまんの本家本元は、またも孔子である。

孔子の生きた時代、すでに上古の礼制はすたれていた。礼制とは礼儀・礼法・礼式百般にかかわる細則である。それはいにしえの聖人によって定められたものであるという。礼のあるところにこそまことの文化がある。孔子にとってそれは端的に、周王朝さかんなりしときの文化を指した。『論語』「八佾」に孔子は讃えて言う。

「なんとも香り高く端正ではないか。その周に私は従おう」

原文は次のように読みくさせる。

「郁々乎いくいくとして文なるかな。吾は周に従わん」

あやなす文化の花々があふれんばかりに香り立っていたという。孔子はそう信じてやまない。そんなにしえの世をひたむきなまでに敬慕した。

原初の世界に理想の社会が実現していたとする。かつて世界は均衡を保っていた。だがそれはいつまでも続かない。いつしか不調和が広がる。やがて世界は不均衡な状態へと転

落していく。こうした悲観的な見方がひそんでいる。下降的な歴史観がそこにある。

現在は悪しき世である。過去にこそ理想の世が実現していたという。だが、かつてもそんな結構な時代があったためしなどない。つまりは観念の中の拠りどころに過ぎないのだが、こうした理念だけは中国思想に連綿と受け継がれていった。実現しなかったからこそ、かえって理想は生き続けたとも言える。

孔子にとって、理想の社会とは遠い過去に存在したものである。未来にあるものではない。上古の帝王たちの時代にこそ人倫の範型を求めるべきだという。人としてあるべき姿とは、彼らが実現していたものにほかならない。これを「先王の道」と呼ぶ。それからあらとはことごとく墮落した時代である。先王の道の復活、上古への回帰こそが後世の人間の務め。先王の道に倣^{なま}って、かつておこなわれていた礼を実習する。「学びて時にこれを習う」のである。その積み重ねを通じて礼をおのが身に体する。すべてはここから出発する。のちの儒教において重要となる徳目は「孝」であり「仁」である。孝にせよ仁にせよ、その実践は行為の規範である「礼」によらねばならない。礼は伝統にうらづけられるべきものである。

同じ「八佾」にこんな話がある。

孔子が魯の国の靈廟において礼儀の作法をこまごまと尋ねた。ある人がそれを見て言った。「鄒の町の小役人の倅が礼を知っているなどと誰が言ったのか。靈廟に来てあれこれ聞いている始末ではないか」

孔子は言う。

「それが礼なのだ」

鄒は魯の国の町の名で、孔子の亡父叔梁紇はその役人だったという。

ふりし世の礼制について孔子が知らなかったただけではない。そんな昔のことを記憶している人などもはやいなかった。だからしつこく質問したところで恥にはならない。それどころか、万全を期して事細かに聞いたですことこそ礼の精神にかなっている。そう言うてのけたのだ。

儒教の聖典『礼記』は、かつておこなわれていたとされる礼制の記録である。周王朝が建国されたとき、初代周公がこれを定めたものと信じられてきた。孔子はこれを規範とし、これに倣い、これを復興し、今の世に実践すべく、あてのない努力を重ねてきたのである。それでもなお、孔子のこの一徹な心酔ぶりが、なぜか慕わしくもある。

神霊は人から遠く隔たったところに
おられるのでしょうか。

先祖を祀る。これが儒教における儀礼の中心である。葬祭をはじめとするあらゆる礼制は驚くべき煩瑣はんさな規則に満ちており、儒教の聖典『礼記』および『儀礼』の記事の大部分がそれによって占められている。

何十日にも及ぶ葬祭がとどこおりなく終了したのちに、故人の靈魂を安らかにするため祭祀が時を置かずにおこなわれる。これを虞祭ぐさいと呼ぶ。「虞」は安らかにする意である。

新たに主人となった喪主が故人の靈魂を祀るにあたり、故人の孫を選んでその「かたしろ」に迎える。これを尸しという。尸は屍しのもとの字であり、本来は「しかばね」を意味するが、『礼記』「郊特牲こうとくせい」に「尸は神の象なり」とあって、神靈をかたどるものとされた。

子が親を祀るのに、もはやその姿かたちを見ることがかなわない。そこで尸を立てた。なぜ孫かと言えば、祀られる者の嗣子は喪主本人なので尸にはなれない。尸が故人のかたしろである以上、故人のおもかげを宿している孫が求められた。これに故人の服をまとわせ、故人その人のごとくになった尸を招いて饗宴が始まる。

主人の兄弟が尸をともなつて門に入る。主人は尸に着座をうながす。このとき次のように問う。

「神靈がどこにおられるのかわかりません。あちらでしょうか、こちらでしょうか。それに問う。」

とも神靈は人から遠く隔たつたところにおられるのでしようか」

原文は「神の在るところを知らず。彼に於いてか、此に於いてか、或いは諸れ人に遠ざかるか」と読みくさせる。天と地と、東西南北の四方に向かつて故人の靈魂に尋ねたのち、これを招くのである。

庭で犠牲を屠り、その頭を室内に運んでお供えする。尸をもてなすにあたり、主人みずから最善の品々を調える。生肉を小ささまさまに切つたものをあつらえ、茹でたものや煮たものをあつらえておく。どれか一種では神靈の心になうかわからないからである。

ここには尸に仕える人々の恭順が示されている。ここまでしたところで、亡くなった人の靈魂がはたしてどこにいるのか知るすべもなく、誰にも定められない。それでもなお、あとに残された人々は奉仕に心を砕くのであった。

饗宴の座で、主人は尸を拝し、三たび食を勧める。尸が三たび食する。また三たび勧め、三たび食し、さらに三たび勧め、三たび食する。これを九飯という。さらに主人は酒を爵という器に酌んで尸に勧める。主人から尸へ、尸から主人へと献杯がくりかえされる。

やがて宴が果てると、主人は哭し、夫人も哭する。哭は慟哭である。これも儀式の一環であった。尸が門を出る。主人は夫人とともにふたたび哭する。

以上で一回の虞祭が終了する。

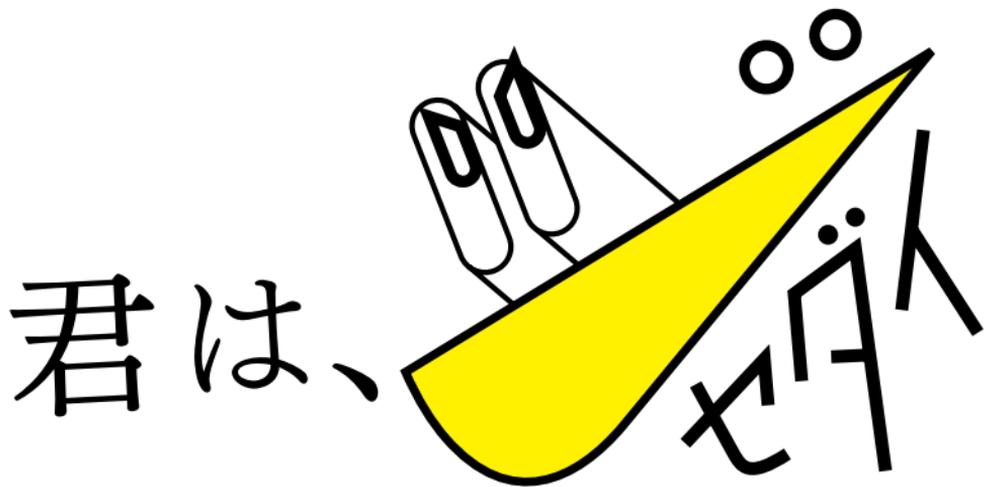
昔の中国の人々は考えた。人は精神と肉体からできているのだと。

精神をつかさどるものを魂こんといい、肉体をつかさどるものを魄はくという。魂と魄とがひとつに結びついていてるとき、人は生を営んでいる。やがて生を終えると魂魄は分離すると考えた。

かくして子孫は祭祀の場で、はなればなれになった先祖の靈魂を呼びもどして再生させたのである。先祖の忌日にもまた一族の者を選び、そこに魂と魄を依りつかせた。香を焚いて天から魂を招き、酒を大地にそそいで魄を呼び起こす。こういう習俗は地球上の多くの民族がおこなっている。いわゆる招魂儀礼である。漢民族だけのものではない。

後世の儒者によつて肅然しゆくぜんと整備された典礼からはおよそ想像もつかないような、恍惚に満ちた降霊の儀式によつて、死者はいつときなつかしい家族のもとに帰ることができた。孫の体に移った亡き人の靈魂を、心を尽くしてお迎えする。残された者たちはあたかも死者にまみえるがごとく、死者はその場に居ますがごとく、幽冥境を異にする一族がふたたびつどいあつて正餐にあずかる。かつて目の前の御馳走をともし、ともに談笑し、ついにみまかった人も、今日はここにいる。

こうした死者と生者のむつまじくもった世界はしかし、いつしか漢民族の文明社会から遠ざけられ、冷たい秩序の背後に追いやられていった。それでもなお、亡くなった人の魂に語りかける行為が絶えてしまったわけではない。私たちにとってはどうかだろうか。次項で考えてみたい。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!